永野金山の歴史を探る

薩摩藩の財政を支え、開田事業や近代産業の礎を築いた永野金山

およそ三百年の歴史を刻んだ永野（長野）金山は、宮之城島津家四代島津久通が石見から招いた内山与右衛門に金山探査を命じ、寛永十七年（一六四〇年）、夢想谷の地に金鉱を発見したことに始まります。当時、藩財政が厳しかった薩摩藩にとって、金山の発見は極めて重要なものでした。そのため、時の藩主島津光久は幕府に採掘の申請をし、許可を受け、金山の採掘を始めました。金山には金山奉行が置かれ、延べ約二万人の坑夫が採掘にあたりました。産出された多くの金は、薩摩藩の財政を支え、開田資金や多くの産業に投入されました。

しかし、金鉱発見から二年後、薩摩藩が潤っては困るとの幕府の考えや全国的な飢饉も重なり、幕府より金山閉鎖の命が下りました。そのため、薩摩藩は、十三年もの月日を要して、幕府に再開請願を行い、明暦二年（一六五六年）、ようやく再稼業を果たすこととなりました。

その後、奉行所を山ケ野に移し、山ケ野金山と称して金の採掘が行われましたが、産金量は徐々に減少していきました。

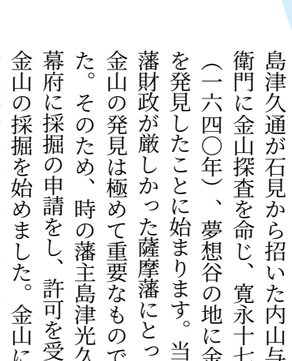
明治に入ると、フランス人鉱山技師のポール・オジェを雇い、更なる金の増産と機械化に取り組みましたが、産金量を増やすことは出来ませんでした。そのため、金山の大拡張を計画して胡麻目大通洞の拡張などが行われました。

大正には、鉱業館を薩摩興業株式会社金山鉱業所と改め、近代化が図られるも、搗鉱所全焼の災禍に遭遇し莫大な損害を被りました。しかし、すみやかな復興事業に取り組み、一年足らずで最新式の搗鉱製錬所を再建し、他の大鉱山に並ぶ金鉱山となりました。

後に、太平洋戦争が勃発し、金鉱業整備令に基づき休止の指定を受けて、製錬操業は中止され、主要坑道の保坑管理だけを行うようになりました。諸機械類のほとんどは政府の命により他の主要鉱山へ差し出されました。

終戦後は、金の重要性が高まり、再興を期し復旧に着工するも産金は予想に反して上がらず、収支が伴わなくなり、昭和二十八年七月に閉鎖され、昭和三十三年には閉山となりました。

島津久通

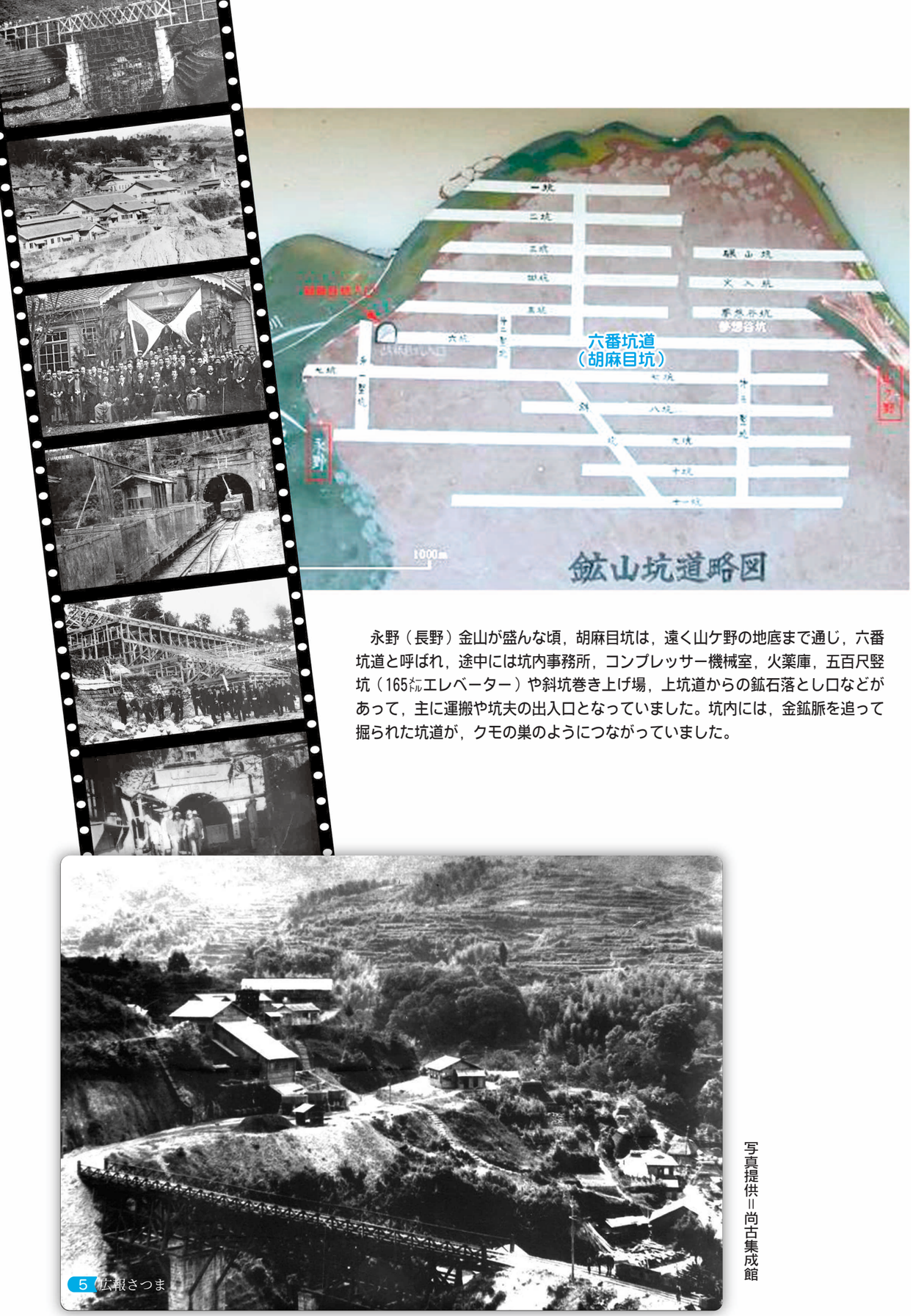


慶長九年（一六〇四）、諸県郡真幸院末永に宮之城島津家三代島津久元の子として生まれる。四代領主（一万五千石）となり、国家老となる。金山や新田の開発、植林や紙漉の殖産林業に貢献する。寛文十年（一六七〇）、文禄・慶長の朝鮮出兵の始末を書いた「征韓録」六巻を編する。延宝二年（一六七四）十二月三十一日没　享年七十一歳。法名は湛水院殿徳源道智大居士、菩提寺の宗功寺墓地に葬る。久通は生まれつきひげが濃く、「ひげ図書殿」と愛称され、また後世人はその幾多の功績を讃えて、「徳源公」と敬慕している。

永野金山歴史人物伝　島津久通と西郷菊次郎

西郷菊次郎

文久元年（一八六一）、西郷隆盛の長子として奄美大島で生まれる。少年時代にアメリカ留学、また西南の役に薩軍として従軍し、延岡・和田越えの戦いで負傷し右足を失う。その後、政府に仕えてアメリカや台湾で勤務し、さらに京都市長を経て明治四十五年（一九一二）、島津家鉱業館長に就任。青少年の育成のため剣道や学問を教える。昭和三年（一九二八）十一月二十七日没　享年六十八歳。その功績を永野村民がたたえ頌徳碑を建立（現永野交流館）。また現在では毎年、西郷菊次郎顕彰剣道大会を開催し、その遺徳に応えている。



永野（長野）金山が盛んな頃，胡麻目坑は，遠く山ケ野の地底まで通じ，六番坑道と呼ばれ，途中には坑内事務所，コンプレッサー機械室，火薬庫，五百尺竪坑（165㍍エレベーター）や斜坑巻き上げ場，上坑道からの鉱石落とし口などがあって，主に運搬や坑夫の出入口となっていました。坑内には，金鉱脈を追って掘られた坑道が，クモの巣のようにつながっていました。

写真提供＝尚古集成館